

2. 2 厳しいニューヨークでの生活

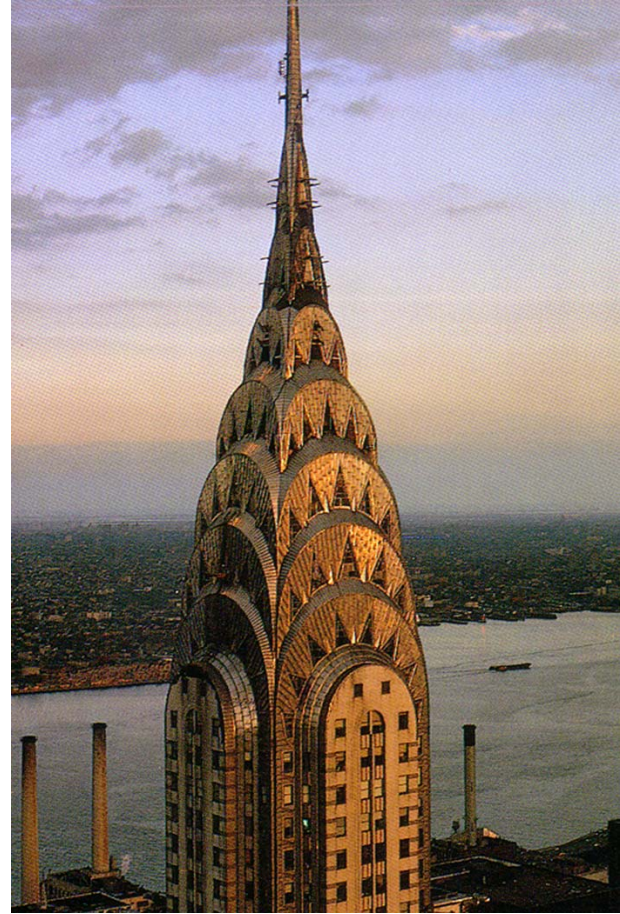
ニューヨークの街、そのものが私にとっては現代建築と西洋建築のミュージアムであった。アメリカの繁栄の歴史を物語る様にすばらしい建築が建ち並んでいた。週末になるとカメラを肩にかけ、建築のガイドブックを片手に、碁盤の目の様なマンハッタンの街を隈なく歩き、建物を見て回った。仕事を探して歩いていた時とは異なり、心に余裕が出てきたのか、古い汚れた建物でさえ、美しく、すばらしい建物として見る事ができた。超高層の建築群が街並みをつくり、私の上からおおいかぶさってきそうな感じがしたが、それらと闘う気力を十分持っていた。逆にそれらの超高層の建物が私を励ましてくれるかにも感じられた。

摩天楼とよばれる様なアールデコの建物は、その建物の頂点（ペントハウスとよばれる）が美しい。それとまた地上まわりの建物の詳細も美しく、芸術である。

又、現代建築の超高層の代表作となっているシーグラムやレバーハウスのビルはそのプロポーションや詳細がシンプルで美しい。マンハッタンは建物ばかりでなく、その碁盤の目の街の、建築群の中に構成されている大小の公共の広場もすばらしい。セントラルパーク、ロックフェラーセンター、タイムズスクエア等、街のスケールとマッチして、心地よい空間となっている。



白いシーツのようにいつも人工の滝が流れるペリーズポケットパーク、



クライスラービルディングのペントハウス、アレン設計

私が最も感激した空間は、ペリーズポケットパークと呼ばれる、超高層群の中の小さな空間に作られた、13m×50mくらいの公園である。公園の奥の壁一面、水がシールの様に流れ落ちていた。両壁はアイビーでつつまれて、小さなカーブルストーンのパavingに、小さな葉のハニーローカスの木々が3m間隔く

らいに植えられている。その木々の葉が、上部空間をおおっていた。 シンプルなメタルのテーブルとチェアが置かれてある。その流れ落ちる水を見ながら座っていると、心が落ちつき、厳しい乾いたニューヨーク生活をまったく忘れさせてくれた。私は仕事探しをしている時、よくこのポケットパークに来て、心を癒した。ニューヨークは、建物や作られた空間が素晴らしいだけでなく、そこに住む人達の生活と街がうまく溶け合っている。



グリニッジビレッジの広場では、アーティスト達がパフォーマンスをしている。歌い、踊り、楽器をひき、絵を描いている。ある公園ではバスケットボールをし、ジョギングをし、又、芝生に横たわっている。心の豊かさ、満足感の得られる街の公園である。大半は、ヨーロッパからの移民達

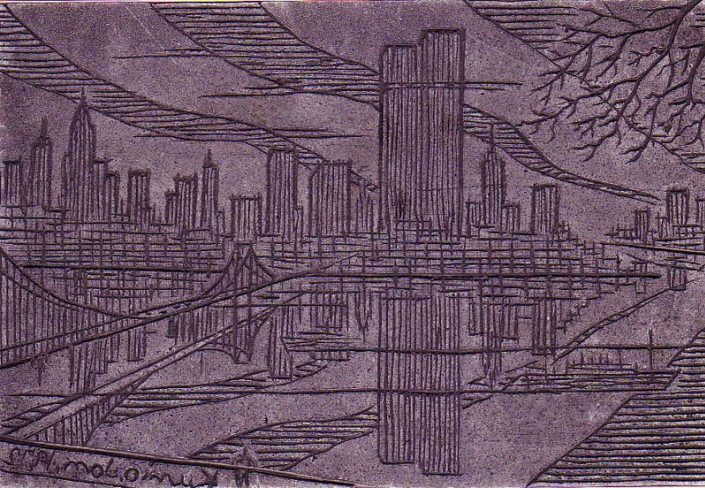
休日、ワシントン広場で市民が歌い踊る。人類のルツボの広場

が自由という名の基に、作りあげた文化である。若い建築家の修業の場としては素晴らしい街である。

ニューヨークはメルティングポット（人類のルツボ）と言われる様に、世界各国からの移民達で構成されている。私が毎晩通っていた英語のアダルトスクールはまったく人類のルツボの場であった。彼等の多くは、豊かさや自由の国アメリカへ夢を持ってやってきた。彼らの多くは働けるビザを得ずに働いていた。ある人は、共産国の国から抜け出し、ヨーロッパを転々として、ようやくアメリカにたどり着いたという。戦争や政治の関係で、彼らにはもう帰る国がなくなってしまう人もいた。ビザや移民局の話になると、彼等の顔はひきしまる。私は一応、移民法をおかさずにギリギリの線で働いていたし、まだ帰ることの出来る国がある。私はラッキーな人間であると思った。

ニューヨークの生活もだいぶ慣れてきた。アメリカ人の友達も出来た。夜のパーティーにも出かける様になった。パーティーと言っても人が集まって、飲んだり、食べたりすることを、すべてパーティーと呼ぶのである。

ルームメートの黒人との生活もなんとなく、しにくくなり、自分で安いアパートを借りた。スパニッシュハーレムという所で、98番通りのイーストサイドでプエルトリコ人が多く住んでいた。100年もたつかと思われる様な、昔の古い赤レンガ造りの、エレベーターがついていない5階建てのアパートが建ち並ぶところである。事務所からもらってきた大きな、50年以上もたつ様な、厚い、古い製図板を箱の上に乗せて、そのアパートに



版画、1972年に彫ったニューヨークの想いで

自分の設計アトリエを作った。その他に、そろえた家具は、新しく家具を買った人が、あるいは引越す為になくなった家具をアパートの前の歩道に出してあった物をもらってきたとか、知人からいただいた物ばかりであった。ニューヨークに数年住んでいたファッションデザイナーの黒沢さんから教えてもらったことだが、「マンハッタンは一生住む所ではない、テンポラリーの生活だから新しい家具を買う必要はなく、道には良い物がたくさん落ちている、そこから自分の好きな物を選んで、消毒のスプレーをして、綺麗にすれば十分です。我々貧乏人のアーティストは、そこから始まるのです。そして、又、引越する時は、それらを捨てていくだろうし。」と教えられた。街に建物を見に出かけない時は、いつも建物のパースとか、何かスケッチを描いていた。一日中、アパートの外からスパニッシュのミュージックが大きな音で聞こえていた。ドラム缶を半分に切って作った楽器、スチールドラムのラテン系の軽やかな音楽が私は好きだった。

突然、ある時（1972年の春だったと思う）大学の恩師の船越先生が仕事でニューヨークに来て、私に会いに来て下さった。これまでの私の建築は、すべて先生から学んだと言っても過言ではない。又、私の生き方、価値観も先生から大きな影響を受けた。先生が私に会って最初に言われたことは“井上君、あんな所に住んでいて大丈夫かい？ あぶなくないかい？”という私の身を心配する質問であった。“ニューヨークはどこに住んでも危険度は同じです。私は何も盗られるものはないから安全です。もっと金を出せば良い地域に住めるけれど、逆に盗難の危険が高くなります。私は大学院に入るための金も貯めなければならぬし、先生、だいじょうぶですよ、殺される様な場所に行ったり、行動はしませんから・・・”と私は言った。

久しぶりの再会であった。話すことはほとんど建築のことだった。私は先生の事務所で2年間程働かせていただいた。私が辞めてから（ビザの関係もあって休職ということにさせていただいてあった。）も先生の設計事務所、アルコムは忙しく、若い人を何人か雇ったという。“あまり無理をせずにガンバレヨ、”と先生は言われた。建築家として生きようとしている私を確認して、おそらく多少安心し、又、半分不安な気持ちでニューヨークを去って行かれたと思う。

建築の設計図の描き方は、日本もアメリカも同じであ

スパニッシュハーレムの住居地区、98ストリート





自然と古いビル、摩天楼が多いセントラルパークウエスト

はスケッチや透視図をよく描かされた。安い給料でよく働いたので、気に入られていた様であった。そろそろ永住権の申請のスポンサーになってもらう話をしようかな、と思っていたところ、予定していたプロジェクトが入らなくなって、解雇になった。

アメリカでは通常、仕事の忙しさを人員整理で調整する。私は永住権のビザを持たずに働いていたのだが、税金を納めていたので失業保険をもらうことが出来た。毎週失業保険をもらう長い列に並んだ。

2度目の仕事探しは、最初に比べると比較的楽であった。しかし、まだグリーンカードと呼ばれる永住権を持っていないので、危ない綱渡りをしているような不安な気持ちの毎日であった。

今度の設計事務所は、ロバート・カーン・アソシエイツというユダヤ系の事務所で、主としてショッピングセンターや集合住宅を設計する事務所であった。若い人が多く働いていた。私は建築のデザイン部で働くことになり、よくスケッチを描いた。安い給料の割には仕事が出来たこともあって、気に入られたようであった。

今度の会社では、出来るだけ早く永住権を取得するスポンサーになってもらおうと思って、社長に相談した。心よく引き受けてくれた。

永住権を申請して、3年、4年経っても取れない人もいるという。一度申請して、こじらせると、何年経っても取れないという。移民法を専門とする弁護士を雇って永住権を申請する前に、私なりに移民法を勉強した。本を読んだり、講習を聞きに行ったり、何年たっても永住権をとれない人に話を聞いたりした。プロフェッショナルのカテゴリーで取得するのに、まず、労働局

建物も車も人種もいろいろ集まっているグリニッジビレッジ



の認可を得なければならない。その頃アメリカは不景気で、失業中の建築家が沢山いた。特にニューヨークには多かった。私は、「当事務所においては、日本の伝統的な内装設計やランドスケープを設計出来る日本人の建築家が必要である」という文章を作成した。実際にあるショッピングセンターを設計した時、モールの中に日本的内装とガーデンを設計した。アメリカに現代建築を勉強しに来た私としては、多少うしろめたい気持ちになった。こうでも書かなければ、失業率の高いニューヨークの労働局では認可してくれないということであった。これを申請して、すべてがうまくいくと、約一年でグリーンカード（永住権）を取得することが出来る。その間、この事務所は忙しく、仕事を続けることができるよう願うばかりであった。もうB2のビザの期限は切れた。しかし、このグリーンカードを申請している間は合法的に滞存出来るし、働けるのである。